



「貧しさの共有」

深田 寛

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい、休ませてあげよう。

(マタイによる福音書11章28節)

何時の時代も貧富の差があります。この差は社会秩序の問題や個々人の人生を左右する場合がしばしばです。

そのような中で、ノーベル平和賞受賞者マザー・テレサの言葉を思い出します。

インドの路上生活者が動物と同じように、路上で死を待つ人々の体を洗い、白い衣を着せ、手を握り、静かに死を迎えさせる。人として死ぬることを感謝しながら息を引き取る働きをなさいました。

彼女がこの活動の決心をした時に、彼女の心に響いた言葉は「富を分かち合うのではなく、ないもの(貧しさ)を分かち合う」であります。

マタイによる福音書11章28節の言葉は大変多くの人々の記憶に残る言葉です。

ここに書かれている「重荷」はもっぱら当時、日常生活の中で、人間の自由を拘束する「律法」がもたらす、精神的重荷を指しますが、それだけと狭く考える必要はないと思います。「重荷」は責任を負い、精神的な重圧を意味しますから、精神的な重荷と考えてよいと思います。「疲れた」は肉体的に疲れをもたらすものを指します。

この両者は別々ではなく一体なものです。精神的重荷が肉体的疲れを引き起こし、肉体的疲れが精神的重荷をもたらします。この悪循環に陥ると、苦悩が苦悩を呼ぶ結果になります。

そんな危機になった時に「だれでもわたしのもとに来なさい、休ませてあげよう。」の言葉は魅力ある言葉として響きます。

「だれでも」は人的選別も、苦勞の選別もないのです。「休ませて」は苦勞の終息ではなく休息で、苦勞に敗北せず忍耐と希望を与える休息です。この休息は苦難の勝利の先取です。

イエスは私たちの罪を自らの罪として十字架に渡されました。そのイエスの「休息」を聴く時に「富を分かち合うのではなく、ないもの(貧しさ)を分かち合う」姿勢が生まれるのではないのでしょうか。聖書は貧富の差はイエスの十字架が指示する「貧しさの共有意識」の必要性を語っているように思います。

